武者小路実篤選集

第十卷

武者小路実篤選集 第十巻

青銅社版

武者小路実篤選集
第10巻
昭和40年4月10日　初版発行

検印

著者　武者小路実篤
発行者　真鍋謙二
本文印刷　三恭印刷株式会社
口絵印刷　京橋原色版印刷所
製本　石津製本所

定価　六八〇円

発行所　図書出版　株式会社　青銅社
東京都新宿区納戸町五番地
電話　二六〇局　八七六五番
振替　東京　三四、八九二番

printed in Japan ©

序

人間には、音楽を好きな質と絵の好きな質があるということを、何かで読んだと思うが、僕も勿論、いい音楽を聞けば純粋な感動をうけるけれども、どっちかと言えば絵の方が、自分にはぴったりわかるような気がする。

全部の絵がわかるわけではないが、古今東西の偉れた芸術にふれることで、僕が人間を信用しまた人間を愛するのは事実で、偉れた芸術品にふれると、こういうものを作り得た人間が過去や現在にいた事実に驚嘆し、またそういうものを見て自分の心が純粋に喜べることを不思議に思い、深い喜びを感じて、人生の玄妙さにさながらにふれられる気がする。

殊に芸術品は、それを作った人またそれをかいた時の心の動きに、さながらにふれられるので、それを作ったりかいたりした人の純粋の心の動きに直接ふれられるので、なおそのものの真実であることを直観することが出来、僕が人間に対する深き信用は、その事実によることが

多いように思う。

昔、作品にふれた感じが、今の自分と全部同じであるかどうかは、一概にきめられないが、然しそれを書いた時はそう感じた事が事実で、今でも自分の書いたことが、嘘だとは思わないので、そのまま発表する事を喜んでいる。

昭和四十年四月一日

武者小路実篤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

武者小路実篤選集・第十巻

目次

湖畔の画商　7
美術を語る　267
解題……中川孝

題字・武者小路実篤

湖畔の画商

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

上海まで

一

N兄

今は五月五日午前二時二分前だ。東京の時間だと二時三十五分だ。今日上海につくわけだ。海は思ったより静かだが、船にはよわい僕は昨日は朝飯の時も、少しあぶなくなって途中で逃げ出した。おかげでまだ酔わずに、いい気持ちである。しかし他の連中はもっと元気だ。僕はねてくらした上に、晩飯は船室にまで持って来てもらった。

今少し浪が静かになったせいか、寝床に坐ってこれをかくだけの勇気が出た。昨夜も起きて、手紙をかく机で四五枚原稿をかいて見たが、面白くないのでやめにした。書きたいことが多いが、しかし私事が多いので、自分では面白いが、他の人には面白くないと思ったのと、矢張り少し気持ちがわるくなる心配があったので、もう一息というところで、乗り気になれなかった。

君が横浜のハトバで黙って立っていた姿を今でも思い浮かべる。あの時、僕の子供は三人泣いたり笑ったりし

ていた。下の二人の女の子は抱かれていたのでいつまでも姿が見えたが、上のは泣いたので恥ずかしかったのだろう姿が見えなくなった。

木下利玄の奥さんには何年ぶりであったか知らないが、同じく泣いていてくれたように見えた。その他にも女の人で泣いている人が二三人あった。しかしまた笑いもしていた。しかし僕は悲しくはなかった。

妻は嫂と一緒に皆と少し離れた所にいた。

村の人達は例によって元気にさわいでいてくれた。船が進むに従って六七人の兄弟、そのうちには女の人もいた、が駈ける姿が見えた。僕も夢中で花を振った。

花と僕とは凡そつりあいのわるいものだと思っていたが、しかしああいう時は花をもらうのも悪いこととは思わなかった。しかしもらわなければ、それもいいと思うが、しかし人の情けに感じやすくなっている時だから、少しの好意もうれしい。まして僕は今度の旅行で、人々が、僕のようなもの（謙遜ではない）を随分愛していてくれることを感じてうれしかった。皆、いろいろと心配してくれる。

横浜出帆は君の見ていた通り、元気だったが、しかしその翌朝、名古屋ではみじめだった。しかしそれが、あとのためには大へんよかった。

船に弱い人、船になれない人が欧洲にゆく時は、横浜からのるのがいいと僕は人にすすめたく思っている。一晩の船だが、船というものになれるし、それ以上、いろいろしくじりをして、次の時の用心が出来る。

僕なんか、殊に利益が多かった。一々かくとあまり馬鹿気ていてちょっと恥ずかしい。洋服が矢張り祟った。しかし最初のしくじりは便所だった。

僕はさがしてやっと見つけて用を達して出て来た。ちょっとへんだと思ったことがあるが、しかし船のことだ

と思ったので、別にへんにも思わなかった。それから二三時間して、船のなかを歩いている時、もう一つの便所を見つけた。そこにはゼントルマンとはっきりかいてあった。それで念のために前に入った方を見たら、レディースとかいてあった。しかしもう二三時間前のことだから、赤面はしなかったが、あぶないものだ。

洋服の方は、僕が八時頃ゆかたに着かえて寝たが、遠州灘に怖れをなしたので、早くねてやろうと思ったのだが、へんにねつけないのだ。それに十時ごろ起きる必要が出来た。まだ皆起きているので寝まきのままでも出られないので、また御丁寧にネクタイまでして、出かけたのだ。どこへ出かけたかは、わかっていると思う、例のゼントルマンだ。一々着かえては厄介だと思った。しかし酔わないうちは滑稽ですむが、翌朝、上陸しようといろいろさがしものをしているうちに気持ちがわるくなった。何しろ、カバンというものは持って歩いたことがない僕だ、いつも風呂敷ですましている僕が、四つのカバンを出したりひっこめたり、カギをかけたりはずしたり、僕は人並みはずれて用心がよく、馬鹿正直だから、一々用がすむとカギをかける。かけるとまた、開ける必要が出来てくる。そのうちに、室はせまくあたたかいと来ているので、すっかり気持ちがわるくなった。その上、首すじに出来ていた腫物がいたみ出すし、前から窮屈だったワイシャツがますます首をしめつけるので、すっかり閉口した。それで朝飯を食う勇気もなく、誰も上陸しないうちに、僕一人上陸した。小さい風呂敷づつみを一つもって、そのうちには嫂にもらった化粧道具も入っていた。何しろ髭をそる必要があるから。

自分は自動車をさがしたが見つからなかった。そのうち一軒自動車屋を見つけたがねていた。起こそうと思うと一人の鼻たらしの女の子、十ぐらいだろうがやって来て、こっちに来るように言うのであとについてゆくと一軒おいてとなりの自動車屋に案内された。この娘なかなか利口ものだと可笑しかった。娘は一疋のムクドリをつかまえたつもりで得意らしくお父さんを呼んだ。

その時八時。

二

今、七時四十分、船は揚子江をのぼりつつある。右の方の岸は全く見えない。左の方はかすかに岸らしいものが見える。帆船が数点浮かび、水の色がすっかり濁って赤い。風呂のボーイが今日は水がキタナイから風呂が出来ないと断わりに来た。そのかわり船はゆれない。だから僕は起きて袴をはいて手紙をかく机の一つを占領して、これをかいている。

今まで海の真中を通った時、ツバメが四五羽船のまわりをとんでいた他、船も鳥も見えない時があった。夜中に船がボーボー吠えるのでおきて見たら、船が二艘三つばかり光をつけて遠くに見えていた。

ここでは鳥もとび、船も点々、気持ちものどかで、船に弱い僕は幸福を感じていた。

外国に来たという感じも心うれしい。大きな海のような川、入江と言っても大きすぎる。

さて、前のつづきを語ろう。

なかなか利口な鼻たらし娘にうまくつれられて商売敵の所から、捕虜になった僕は、名古屋の停車場で一円七十銭はらっておりた。汽車の出発時間を見ると、二分半後に汽車で出るわけ、あわててとび込み、二等にのる。切符は船で一等のをくれたが、一等にのるのは気がひけていたら運よく一等のない汽車で安心して二等にのる。

僕が東京駅を三等でたったと不思議に思った人もあるようだ。新聞にもとくに三等としてあったのがある。僕は大概三等だ。僕ばかりではない、志賀だって三等が多い、他の友人も殆ど三等だ。しかし東京をたつ時は、わざと三等で立って、船で一等なのは、ちょっと偽善者くさみを人に感じさせる恐れ（僕はそういうことは感じな

いことにしているが、実は敏感すぎて、自分でそれに負けてはきりがないからなるべく不敏感の習慣をつけている）がないでもない。しかし新しき村の兄弟が大勢横浜まで送ってくれるのに、自分達だけが二等もおかしいし、皆に二等をおごらせるのもいやだから三等にしたまでだ。

船は自分は二等にしたかったが、兄のすすめで、すすめというよりも一人ぎめで一等にした。僕は船がよわいし、原稿もかきたいし、一人の生活になれてもいるので、一等はよかったと思うが、しかし二等や、三等だったら、それもいいと思っている。そういう点、僕はわりに融通がきく、新しき村の八年間で、僕はどんな粗食でも出来るし、キタナイ所に居ることにもなれている。と言って歳のせいで一等を、別に贅沢な所とも、いい所とも思っていない。三畳もない室は、今に南洋でむされると、むし殺される恐れがあるとも思う。それより皆と一緒でも広々とした所の方がいいのではないか、なぞとも思う。しかし船には弱いが、暑さの辛抱なら他の人には優っても劣らない自信がある。

宇野君の真似をして閑話は休題として、話をすすめる。

汽車はのこのこ汽車だが、自分の家に帰って来たような安易さを感じた。景色も平和でのどかだ。気持ちのわるさもいつのまにかなくなり、ぐっすり眠った。二時間あまりねたらしい。目がさめた時は大津あたりだった。一々駅につくが、少しも気にならない。

こんな平和な所に住みながら（非常時さは感じられなかった）外国へゆく奴の気がしれないとふと思った。

京都におりようか、大阪にゆこうか迷った。結局大阪にゆくことにきめた。腫物を見てもらうこと、ワイシャツの首のまわりのゆるい奴を買うこと、この二つが自分の第一の仕事だった。友人に逢うのは勿論喜びだった。

自分は三四日、大阪、奈良をぶらついた。そしてすっかり元気にもなり、幸福も感じた。

奈良の志賀の所に二晩泊まり、妻の父の大阪に二晩泊まった。妻は自分の弟の妻と一緒に、残してあった荷を持って来た。

大阪でも送別会をやってもらった。……

矢張り友情のありがたさを感じた。

僕は実際、幸福者だと思う。……

二日に神戸をたった。テープを投げあった。

三

名古屋までの旅行で洋服生活にこりた僕は、船にのるとすぐ和服に着換えた。すっかり楽な気持ちになれた。海も静かで門司までの旅は幸福だった。

食堂で和服なのは日本人では僕一人、あと、老人の英国人が一人和服だ。この英国人は禿の点でも僕に一日の長がある。日本の古代史については非常にくわしい人だと聞いている。この人のことはこの航路でかく時があるかと思う。先方の希望で、食卓を共にすることになったから、勿論日本語のうまい人だから、有望だ。

*

和服は同じ食堂に集まる人のうちでは男では日本人では僕一人だ。一体にこの船は日本の船だけに、日本人が多いが皆洋服を着ている。また洋服になれている人ばかりらしい。しかし僕はそうはゆかない。

今度洋行するので始めて洋服というものをつくって始めて着て見た。学習院では制服を着ていたが、十九か二十歳で学習院を卒業してからはずっと和服ですごした。洋服が嫌いというわけではなかったが、つくる必要がな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com